

伊藤秀五郎著

「北の山・続篇」を読んで



八木健三

伊藤秀五郎さんについては、いろいろな方からうかがっていたが、ことに直行さんからは「伊藤秀サンがネ……」とか「秀五郎が……」といった調子で、学生時代のエピソードなどもきかされ、北大山岳部創立の大先輩であり、

山の詩人であることなどは存じあげていた。しかし、直接お目にかかってお話をうかがうようになったのは、創立以来会長をつとめられた東條猛猪氏にかわって、伊藤さんが北海道自然保護協会の会長になられてからだった。植物園で時折り開かれる理事会は伊藤さんが会長として司会されたが、ご自分から積極的に意見をいわれるというよりは、皆の話をよく聴かれ、要所々々でご自分の考えをのべて討論をまとめるという風だった。その頃、賛否両論が喧ましかった大雪縦貫道路建設について、皆が熱っぽい議論をたたかわせるのを、端正な顔を心持ち引き緊めるようにして聞いておられたのを思い出す。その後は喉頭ガンに侵されたため、さらに無口になられたのは痛ましかった。

伊藤さんの遺稿集「北の山・続篇」が刊行されることはかねてうかがっていたが、先頃、石川俊夫さんが私の

病室を訪れ、「お見舞に……」と丸善の包紙の中からとり出して本書を下さったのはうれしかった。じつは「鬼のカクラン」のたとえのとおり、健康を幸いに無理を重ねたうえに、学会の懇親会でメートルをあげすぎたのが祟り、二月初め急性胃炎による貧血症で医大病院に入院させられてしまった。検査の結果、胃も腸も正常とわかってホッと一息ついたが、珍しく静養の時間がタツブリとあたえられ、いささか無聊をかこっているところだった。そこへ本書をいただいたので、じつにありがたかった。

外は真冬日の連続の寒さなのに、二月の陽光を窓いっぱいにうけた病室は温室のようで、ベッドに横たわってこの本を読みながら、ふと「こんなゆったりした気分では本を読むのは何年ぶりだろう……」と考えたことである。

名著といわれている「北の山」はまだ読んでいないので、私が読んだものといえば、伊藤さんが時折り北海道自然保護協会の会誌に発表されたものだけだった。今度本書を拜見して、その文が透徹した名文であるのに改めて感心した。また青年の日の多彩な活動と交友、山行に

対して抱く深い思索、冷静な人生を見つめる目……。こうしたものに私は思わず深く引き込まれた。そこでその一読者の印象を書き記したのがこの拙文である。むろん、書評や紹介には他に多くの適任の方々がおられるので、それを意図したものでないことをお断りしておく。

一九二三年、十七才で北大に入った伊藤さんは、つかれたもののようにまだ地図も充分できていない北海道の山々を登り、また文芸部の幹事として詩にも打ち込む。そして一九二六年にはスキー部から独立して、北大山岳部を創立する。この時代で伊藤さんにとってもっとも重要な山行は、一九二八年二月の石狩岳スキー登山であり、これは北海道スキー登山史発展期の幕あけをなすものだった。それだけにこれにかける伊藤さんたちの執念はつよく、綿密な計画がたてられる。最後の人家の層雲峡温泉から石狩岳まで三日行程の中間には、わざわざ前年の夏二つの小屋を建て、これを中継点として、ついに厳冬の石狩岳頂上に初めて立ったのである。強い雪と霧のため視界のきかぬ頂上に。あきらめて下り沢に入ると輝かしい陽光がさしこみ、「谷の上には紺碧をたたえてあく

まで透徹した二月の蒼空だけが、狭く扇形にひろがっている」のを見て、初登頂の喜びにチョッピリ残念さを交えた伊藤さんの気持が伝わってくる。

そのあとは、日高山脈に関心が集中される。同じような周到な計画のもとに、日高の最高峰幌尻岳攻略がすすめられる。石狩のときと同じく、前年秋中継小屋がつくられ、一九二九年一月、まず戸萬別岳に登頂、偵察のあと、その翌日、幌尻岳登頂に成功する。この最後の登頂の日に、伊藤さんが雪橋から落ち、靴を谷川の水で濡らしてしまふ出来事があった。靴下はとり代えたが、靴は凍って固くなった。「そのまま登ってもおそらく大丈夫であろうとは判断されたが、…この小故障が原因となって不幸を招来しないとは断言できない」と思った伊藤さんは「とっさに自分ひとり登高を断念すべきである」と考え、他の隊員にその旨を告げると、「確実な足どりでのりて小屋に引返さすのである。多年の計画が成就しようとする最後の日に、多少無理を承知でも目的に向って強行しようとするのが、人情の常というものだろう。きわめて慎重な判断で、自己の慾望をおさえて隊の成功を優先させるという、伊藤さんのきびしい信念に深い感動を覚えるのは、おそらく私一人ではないであろう。

その甲斐あって、幌尻岳の頂はついに極められ、その夜、更けるまで成功を祝ったのである。伊藤さんがその長い登山歴の中で、一度も遭難などにあわれなかったのは、おそらくこの慎重な態度と綿密な計画の賜だったであろう。

紀行文のうちではこの二つがもっとも印象深い、「三

月の黒岳小屋日記」などもなかなか楽しい。秋口に一週間分の食糧を運び上げておいたなど、リフトのあるいま考えると遠いむかしのこととなる。

伊藤さんは山岳部で山行に精を出すとともに、「山とスキー」の編輯人となり、文芸部では散文詩にふけり、さらに札幌シンフォニー・オーケストラではフレンチホルンを演奏していたという。まことに多才な人というべきだ。昭和の初めモダン・ボーイ(略してモ・ボ)という言葉が流行ったが、伊藤さんなどは、いい意味でのモダン・ボーイの尖端をいったものだろう。文筆の冴えはもちろん天賦のものであろうが、それをさらに完成させてゆく努力をされていることが、ところどころでうかがわれる。「北の山』の精神的系譜」は、伊藤さんをめぐる親しい岳人のプロフィールを描いているが、その中で「精神的に僕がもっとも触発されたのは板倉さんの文章だった。…僕はそれらの章句を暗記するくらい繰りかえし読んだものである」と記している。「文章上達の秘けつは名文をよく読むことだ」と私たちもよく教えられたものだったが、伊藤さんの名文のかげにはこのような精進もひめられていたわけだ。

「吹くなら蒼水の上で吹いて貰ひませう。えぼるなら吹雪の中でえばつて貰ひませう」というくだりなど、いま読んで胸のすく思いがする名文である」と書かれている(一九六二年)のみをみても、おそらくこの文章は四〇年間も伊藤さんの脳裡をかすめていたものであろう。

「登山の本質に関する「考察」には、伊藤さんの登山観がよくうかがわれる。結論的に要約すれば、「思索的な一面をもつという意味においては、山登りは実につ

の思想であり、スポーツ的な精神に発売するという意味においては、山登りもまた一つのスポーツである」となり、したがって「山登りは、登山家にとっては何者にも換え難き生活であり、精神的な創造でもある」ということになる。いまこのような求道的な立場から登山を行っている若者はどのくらいいるのだろうか。

「行為と冒険」には学校山岳部としてのあり方はいかにあるべきかについて、北大山岳部の創立者として、またその部長としての長い体験と思索とからにじみ出た反省と提言がなされている。これが発表されたのが、戦争もいよいよ拡大しようとしていた一九四一年だったことを考えると、かなり思い切ったものを言っていると感ずるところも少なくはない。

随想・エッセイのうちでは「北海道の熊の話」が実在のしい。熊の話というところ、とかく面白おかしく書かれているものが多いが、伊藤さんの話の中には格別ホラは入っていないのだが、熊のあとをつけて沢を下った話や、逆に熊にあとをつけられた話、さらに熊に道を教えられて窮地から辛うじて脱出できた話など、まことに興味深いものがある。

私など本州に育ってこちらにやって来たものにとつては、北海道の四季のうつりかわりは、ひとときワレケータなものに感じられ、早春の木の芽の色が一日一日と変わってゆくにはおどろかさされたものであったが、伊藤さんはそんな植物ではなく「ふとこの湿り気味でありながらなお無限の温味をこめた土(ポドゾルのこと)の色を通して、うつ物として迫ってくる春を感じた」のであるから、これはじつに敏感な詩人の眼であるといわなければ

ばなるまい。

ヘルヴェチア・ヒュッテのじょ景もせん細で美しい。私もいつか訪れたとき、白樺がびっしりと生え、それこそ直行さんの言葉借りると、「そうめんのように立ならんでいた」のに感心したが、伊藤さんによると、それはホドラーの明るい色の秋の画になるのだ。ここで春よりも秋の方がすきだと述べている中に、「(秋の) 林の中はどことなく枯淡な色と匂いにつつまれ、貧しい心にもなにか深く意味のある思想が閃めくような錯覚を、無意識のうちに感じるからかもしれない」と理由づけているのは、伊藤さんにも自虐的な皮肉屋の一面があったのかもしれない。

「風景について」は珍しく伊勢路の早春のスケッチだ。春の余寒がひたひたと流れてくる丘にすわって鈴鹿山脈をながめながら、すぎ去った戦争をかえりみ、これからの生活の精神的基盤を模索する著者の上に、鶯が一羽、ゆるやかな輪を描きながら飛んでいる。やがて「無言の対話」の詩のうちにこの鶯が再び登場する。光彩を愛する自然児として、無境の空を自由に飛翔しつづ。

「孤棲を性とすれども
自由なる鳥、鶯

かれらもまた幸福である。」

伊藤さんは鶯に託して、自分の気持をうったえているようである。鶯は三度「春の子感」に登場する。それはやはり早春の日、鈴鹿山脈をへいげいしつづ飛翔したあの鶯だ。きつと伊藤さんは鶯が好きだったに違いない。そういうえば、口を真一文字に結んで大きく見開かれたその眼は、どこかに鶯の眼の鋭さがひそんでいたようだ。

伊藤さんはいろいろなところに書いてるように、山の人間関係では、いたって恵まれていたようである。小島鳥水、木暮理太郎、田部重治といった大先輩もいたし、もっと近い世代の横 有恒、松方三郎、浦松佐美太郎、大島亮吉、三田幸夫などの諸氏は、遠慮のない山仲間としての長い交遊があった。このうちで伊藤さんにもっとも大きなインパクトを与えたのが、大島亮吉氏だったらしい。

「大島さんは日本の生んだほとんど空前絶後ともいふべき天才的な山岳人であったと思う」ほど、大島氏に傾倒していた。一九二八年三月二五日、前穂高で大島氏が墜落死したのを知り、十日間何も手につかないほどの歎きの日々を送っている。

「大島君の遺書『山』について」で伊藤さんは登山記、紀行文と総括されるものについて、つぎのような興味ある分類を試みている。第一は登山の客観的な記録で、山岳誌的な登山案内記であり、第二はいわゆる紀行文で、客観的な観察と主観的な感想とを織りませ、登山、旅行をパノラマ的に再現したものである。そして第三は最も主観的なもので、登山で得た考想思索を主たる内容とし、案内記的考慮はほとんどなされない。これこそ山岳文学と呼ぶべきものであるとべている。大島氏には山に関する作品が夥しい数に上っており、その代表作をあつめたものがこの「山」である。この「山」の中には上記の三つのいずれの型の作品も見出されるが、それはおそらく本人が最初から意図していたのではないかと推察する。そうした観点から伊藤さんは「山」の各作品の紹介を試みているが、その中で「荒船と神津牧場附近」は

「正に山岳文学としての一つの最高水準に位置するもの」として激賞している。

話は余談になるが、私の父は若い頃、日本アルプスの地質なども研究し、日本山岳会に入会しており、父の書齋にあったその会員証には二桁の会員番号が刻まれていたことを覚えていた。私も高等学校の頃、父のところに送られるフランス綴の「山岳」の頁を切って、大島氏の文なども読んだ記憶があるが、いま伊藤さんのこの文によって、『山』をよんでみたいと思う。

最後の自然保護に関する論旨は、私どもも自然保護協会の折りに、伊藤さんから伺っていたところで、とくに学校教育と「自然保護」については、かねてから一つの試案をもっておられた。それは教員養成大学に「自然保護学」の学科を設け、生物、地理、地質、海洋、公衆衛生、都市工学など学際的な教育をおこない、教員を養成し、小・中学校の教育課程に「自然保護」を入れる、というのであった。ある意味において、最近北大に新設された「環境科学研究科」はこの構想に共通したところもあるようだが、いまのところこの研究科には「自然保護」に関する講座ができていないのは、いささか遺憾である。伊藤さんは生前本書の刊行を考えておられたようだがご逝去のため、林、望月阿氏の努力によって立派に編輯された。序文は三田幸夫氏の筆になり、装釘は坂本直行さんの力作。表紙の版画も内の高山植物のスケッチも、本書の雰囲気ぴったりとマッチしている。やはり六〇年来の友だからであろう。伊藤さんはよい友に恵まれておられたと思う。——一九七七、二、二八——